

第20回全国児童館・児童クラブ大会KOBE

LINK

～つながるココロ つなげるミライ～

2026.1.15(木)～1.16(金)

大会報告書



主催

全国児童厚生員研究協議会
全国児童館連絡協議会
一般財団法人児童健全育成推進財団

共催

神戸市民間児童館協議会
社会福祉法人 神戸市社会福祉協議会



目 次

大会概要	．．．．． 2
大会テーマとロゴについて	．．．．． 3
大会プログラム	．．．．． 4
《大会1日目》	
オープニングセレモニー（開会式）	．．．．． 5
分科会	．．．．． 7
交流会	．．．．． 25
KOBE イラストについて	．．．．． 26
《大会2日目》	
シンポジウム「継承するということ」	．．．．． 27
エンディングセレモニー（閉会式）	．．．．． 31
全国発議（全国児童厚生員研究協議会より）	．．．．． 33
運営スタッフ名簿	．．．．． 34
新聞記事	．．．．． 37





大会概要

- 【趣 意】 こどもを取り巻く地域や家庭のあり方が多様化し、福祉的課題が顕在化する中、地域におけるこどもの居場所づくり及びこども・子育て家庭支援の中核となる施設の存在が必要不可欠となっている。そこで、全国の児童館・放課後児童クラブ関係者の総力を結集して全国大会を開催する。
- 【目 的】 こどもの育ちや地域の子育ての現状について情報共有するとともに、あらためてこどもの居場所と遊びを通じた児童健全育成について研究協議を行い、児童館の存在意義を内外に発信することで社会的認知の向上を目指す。また、阪神・淡路大震災から30年を経た神戸に集い、各地で頻発する地震や 豪雨など災害時の児童館活動について情報共有し、非常時におけるこどもの居場所や遊びが保障されるための体制の構築や方策について、研究協議する。
- 【テ - マ】 **LINK~つながるココロ つなげるミライ~**
- 【開催日時】 2026年1月15日(木) 12時30分~1月16日(金) 12時30分
- 【会 場】 (本会場) 神戸文化ホール中ホール(神戸市中央区楠町4丁目2-2)
(分科会会場) デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO/キイト)
神戸市立児童センターこべっこランド
神戸市男女共同参画センター(あすてっぴ KOBE)
神戸市立総合福祉センター
- 【参加者】 児童館長、児童厚生員、放課後児童支援員、行政担当者、研究者等
675名
- 【主 催】 全国児童厚生員研究協議会
全国児童館連絡協議会
一般財団法人 児童健全育成推進財団
- 【共 催】 神戸市民間児童館協議会
社会福祉法人 神戸市社会福祉協議会
- 【後 援】 こども家庭庁 神戸市 兵庫県児童館連絡協議会
社会福祉法人全国社会福祉協議会 児童厚生員養成課程連絡協議会
民間児童館ネットワーク 全国地域活動連絡協議会
- 【協 力】 大阪人間科学大学



大会テーマとロゴについて

KOBE大会テーマ

LINK～つながるココロ つなげるミライ～

皆さんが「つながっている」と思える人は誰ですか？自分が好きな場所はありませんか？私たちは児童館・放課後児童クラブでそんな「つながり」を作っています。人は普段の生活の中で、様々な「場」で「人」と出会い「ココロ」の繋がりができます。いつ起きるかわからない災害時には、普段の「つながり」そして災害時だからこそつながった人や心の関係性が自分の支えになります。

1月17日。阪神・淡路大震災のあの日から神戸は間もなく31年を迎えます。時代と共に地域における児童館・放課後児童クラブに求められる社会的な役割も変化しています。

様々な思いや繋がりを確認し、今後も続いていくように願いを込めて、本大会のテーマは「LINK～つながるココロ つなげるみらい～」としました。この2日間が皆様にとって新しいつながりと学びの切っ掛けになること、また児童館同士、職員同士のつながりがより太く強くなっていくことを願っています。

第20回 全国児童館・児童クラブ大会KOBE 実行委員長 金坂 尚人

KOBE大会 ロゴ

こどもたちの意見を大会に反映させたい、という思いから、市内の高校生に大会のロゴ案を募集。集まったデザインの中から神戸市内の児童館のこどもたちが投票して決定しました。



私は、神戸の町に住む人の暖かさや、人々のつながりをイメージして、このロゴをデザインさせていただきました。

神戸の町、人っていいなと思ってもらえると思います。

兵庫県立兵庫工業高等学校
デザイン科 2年 難波 美帆さん の作品



プログラム

<1日目> 1月15日(木)

12:00 開場・受付開始

12:30

◆オープニングセレモニー（開会式）

13:15

移動・休憩・分科会受付

14:00

◆分科会

17:00

移動

18:00

交流会受付

18:30

◆交流会

会場: ザマーカススクエア神戸 神戸マリオットホテル

20:00

<2日目> 1月16日(金)

9:15 受付開始

9:45

◆記念シンポジウム 「継承していくということ」

コーディネーター 工学院大学教育推進機構教授 安部 芳絵 氏

パネリスト

岩手県立児童館いわて子どもの森

チーフプレーリーダー 長崎 由紀 氏

倉敷市倉敷児童館

館長

池田 眞知子 氏

神戸市立大黒児童館・板宿児童館

館長

小野 晃弘 氏

11:30

休憩

11:45

◆エンディングセレモニー（閉会式）

12:30

終了



オープニングセレモニー（開会式）

・開会宣言	全国児童館連絡協議会	会長	敷村 一元
・主催者挨拶	一般財団法人 児童健全育成推進財団	理事長	鈴木 一光
・来賓挨拶	内閣府特命担当大臣(こども政策、少子化対策担当) 衆議院議員 神戸市長 神戸市会 議長		黄川田 仁志 様 関 芳弘 様 久元 喜造 様 菅野 吉記 様
・来賓紹介	神戸市会 議員 神戸市こども家庭局 神戸市こども家庭局 神戸市こども家庭局	局長 副局長 副局長	中山 さつき 様 若杉 穰 様 丸山 佳子 様

【司会】 神戸市立六甲道児童館 児童厚生員 山下 草太 (1995年4月生まれ)
神戸市立すずらんだい児童館 児童厚生員 梶本 彩 (1995年9月生まれ)



1. 開会宣言 全国児童館連絡協議会 会長 敷村 一元

【開会宣言】

阪神・淡路大震災から31年、私達はいろいろな場所で、様々な人と繋がりに続けてきました。そして今日、「第20回全国児童館・児童クラブ大会KOBE～LINK～」。これから先、未来、繋がりに続けてまいります。大会を宣言いたします。



(敷村会長の開会宣言)

2. 主催者挨拶 一般財団法人児童健全育成推進財団 理事長 鈴木一光

平成7年に東京で始まった本大会は、阪神・淡路大震災から31年、第20回の節目を迎え、復興を遂げた神戸で開催されます。近年、相次ぐ自然災害や環境変化の中で、こどもの安心できる居場所としての児童館の役割は一層重要になっています。今大会のテーマは「LINK」です。少子化が進む社会で誰一人取りこぼさず、地域や人のつながりを通じて子供のWell-beingを育むことが大切です。関係各位への感謝とともに、実り多い学びの場となることを祈念します。

3. 来賓祝辞

■ 子ども家庭庁 内閣府特命担当大臣(子ども政策、少子化対策担当) 黄川田 仁志 様

(祝辞代読 子ども家庭庁成育局成育環境課長 安里 賀奈子様)

地域コミュニティが希薄化する中、児童館や放課後児童クラブはこどもの健やかな成長を支える欠かせない拠点です。皆様が日々展開されている精力的な取組は、今後の「居場所づくり」を推進する上での重要な羅針盤となります。子ども家庭庁も「児童館ガイドライン」の改正や「放課後児童対策パッケージ2026」のとりまとめを行いました。こどもの声に寄り添った、安全で安心できる居場所の更なる発展を期待いたします。

■ 衆議院議員(神戸選出) 関 芳弘 様

0歳から18歳まで切れ目なく子どもたちと接して、そして子どもたちを育てあげてくださる児童館や放課後児童クラブの皆さまの活動に心から敬意を表します。東京の品川で勤めておりました時に、家族でよく児童館に行っておりました。娘は赤ちゃんを抱っこしたり、私は卓球を教えたりしていました。このような子ども同士、子どもと大人の心をつながりが大事だと感じています。また、今回の神戸大会では、震災時のこどもの居場所を検証されると聞いています。今回の研修で学ばれたこと、高め合われたことを全国へ広げていただければと思います。

■ 神戸市長 久元 喜造 様

1月17日が間近に迫っている今日、全国の児童館・児童クラブの皆さまが一堂に会する大会を神戸で開催していただきましたことを心よりお礼申し上げます。全国の皆さまの経験が持ち寄られて大きな成果が挙げられることを期待申し上げます。現在、児童館・児童クラブ職員の処遇改善が大変重要で、国の財政措置が不可欠です。地域間格差の是正など、子ども子育ての関わる人たちが安心して働けるよう、問題意識を共有していただきたいと思っています。今大会で大きな成果を残されますことをお祈り申し上げます。

■ 神戸市会議長 菅野 吉記 様

神戸市会を代表してご挨拶させていただきます。神戸によくこそいらっしゃいました。第7回 2005年以来の大会で神戸に全国からお集まりいただいたことに感謝しております。阪神・淡路大震災以降も、わが国では数多くの自然災害が発生しており、災害時における児童館の役割や、非常時にこどもの居場所をどう守るかについて、私たちは議論を重ね、知識を更新し続けていかなければならないと感じています。この機会を通じて共有された貴重な知見が子どもたちの健やかな成長につながることを期待しております。

4. 来賓紹介

※AIによる要約を使用しています



分科会



第1分科会【災害・こども支援】

災害とこども支援

◆プログラム内容◆

災害に遭遇したこどもが、どのように感じ考えているかを過去の災害から学び、児童館・児童クラブの取り組みを踏まえて、防災・復興へのこどもの意見反映・参加反映・参加にどのような支援が必要かを工学院大学教授安部芳絵氏と一緒に探っていきました。

大きく以下の3つについてのスライドや、実際のアンケート結果など多くの資料を基に、参加者同士が意見交換をしながら考えていきました。

- ① 児童館ガイドライン・放課後児童クラブ運営指針の理念であり、災害時のこども支援の土台でもある子どもの権利条約について学ぶこと。
- ② 東日本大震災(2011)/西日本豪雨(2018)/能登半島地震のとき、小中学校生世代が実際にどんな経験をし、どう感じ、考えて行動したのかを知ること。
- ③ 児童館ガイドライン・放課後児童クラブ運営指針を踏まえ、児童館・児童クラブだからこそできる災害時のこども支援を考えること。

災害後のアンケートや聞き取りから、災害後に何をしましたかという質問に、「自宅が津波にあい、特に何もできませんでした」や「破傷風の恐れがあったため、何もできなかった」という意見が出ました。大きな災害の後は何もする気が起きない、これが自然な回復の状態であり、「何かしたい、動きたい」と思うようになるには環境整備が必要となることを学びました。

生活のリズムを取り戻すためにラジオ体操をしたが、「下ばかりみて生活していたことに気づいた。空を見上げるポーズがあり、上を見ることができた」や、「避難者名簿を作成しようと試みて、自分だけではないということが知れた」ことに心や体の回復力の偉大さを知ることができました。



◆参加者の意見、ワーク内容など◆

災害時、大人は生きるための行動を優先するため、なかなかこどもの遊びまで考えられず後回しにされがちです。

西日本豪雨時に被災した幼児に後でその頃の思い出を話してもらおうと「楽しかった」「おもしろかった」と答えていた話を聞きました。つらかった思い出が児童館の職員や同じ被災した仲間と遊んだことによって、楽しい思い出にすげ代わったという話が印象的でした。

日常の児童館では遊具で遊ぶことが多いですが遊具がなくても遊びを伝えることができます。親しみのある児童館に避難してくるかもしれません。災害が起こったら私たちはどう動き、何ができるか課題が見えた分科会でした。

◆まとめ◆

子どもの権利条約と一般原則（第2条差別の禁止、第3条子どもの最善の利益、第6条生命への権利、生存・発達の確保、第12条子どもの意見の尊重）は、同時に成立することが大切であると学びました。

災害時にこどもの居場所を早期につくり、遊びの機会を確保し、配慮することは、こどもの心の回復の観点からも重要であることが安部氏のアンケート調査や聞き取りから知ることができました。



◆担当者より◆

子どもの権利条約と一般原則は同時に成立することが大切であること、震災時は非日常で、いかに日常を取り戻すことが大切か、こども達のすぐそばにある遊び場をいかに早く取り戻すことができるかでこども達の気持ちやこころは平常に戻っていくことができるということを知ることができました。

こども達の声なき声を遊びを通して拾い、遊びでこども達を支えることが私たちの役目であることを改めて理解しました。

STAFF

- ・ 岡田 純子 (神戸市立児童センターこべっこランド)
- ・ 橋本 香寿美 (神戸市立垂水児童館)

2

第2分科会【防災の理解・実践】

防災をポジティブ&アクティブに

考える、学ぶ、実践する

◆プログラム内容◆

地震やゲリラ豪雨、それに伴う土砂災害等が頻繁に発生する日本で、災害について考えると、つい後ろ向きな気持ちになってしまいがちです。児童館を通して子どもたちに災害のことを伝えるときに、「怖い」ということだけでなく「正しく知る」「モシモ防災からイツモ防災」へと考え方を換え、前向きに、より主体的に防災について学ぶための「種」を一緒に学びましょう。

第2分科会は、デザインクリエイティブセンター神戸（KIITO）で開催し、そのなかで活動されている「+arts（プラスアーツ）」と連携し、防災について学びました。

+arts光田氏より、【不完全プランニング…不完全プランニングとは、完成されたパッケージになっていないこと、隙だらけ、穴だらけ、だからみんなが関われる、みんなと一緒にできる、「みんなのもの」になり定着する】という説明を聞き、関わりしろ=余白をあえてつくっておくことの大切さを感じました。

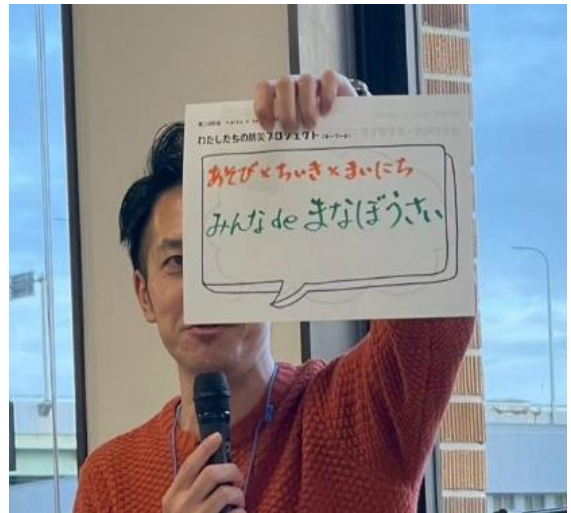
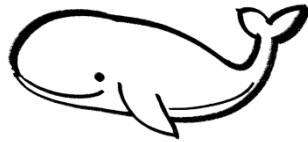
防災体験プログラムの学びと実践

- ① 防災カードゲームシャッフル
- ② おうちの防災なあに？
- ③ きけんはっけん…災害が発生したときに、役立つ知識をカードの並び替えゲームを通して手順を学んだり、暗記ゲームをとおして子どもたちと簡単に取り組むことができるコンテンツを学びました。
- ④ ジャッキアップ体験…最近あまり見かけなくなったジャッキを使って発災時に転倒した家具などを起こす方法を実演しました。いろいろな資機材を一度でも触れておくことの大切さを学びました。
- ⑤ ポリ袋を使ったポンチョ作り体験」ではグループでポンチョ作りをしました。作るだけではなく、飾りつけをすることによって「自分のものになる⇒愛着を持つ」ことを体感しました。



振り返りとして、グループワークでこれからの児童館でできる防災キャッチコピーと個人ワークで具体的に自分が挑戦してみたい活動を記入し、参加者全体で共有しました。

参加者からは、「身近にできることがあって、やってみようとおもった」「楽しむことって大切なんだ」という前向きなコメントをたくさんいただきました。



◆まとめ◆

地震に限らず、自然災害が頻発するなか、児童の安全を守るということは必要でありつつも現場の方々にとっては重圧のことかと思いますが、プラスアーツのコンテンツやグループワークのなかからあたらしくできたつながりを活かして前向きになるポイントになりました。初めてのゲームや知っていることでも、考え方を少し変えるといろいろなことにつながっていく、意外とできるのでは？、と感じてもらえました。



◆担当者より◆

本分科会では、参加者の皆様にいろいろな種をもってかえていただき、その育てるために必要な「思い」を高めることを目的として企画しました。参加者の皆様がきらきらとした笑顔で参加していただき良い研修を開催することができたと感じております。ありがとうございました。

STAFF

- ・樋口 勲 (神戸市立神陵台児童館)
- ・藤岡 美由紀 (神戸市立舞子児童館)
- ・本田 陽人 (神戸市立たかとり児童館)
- ・須藤 華子 (神戸市立桃山台児童館)
- ・平山 直樹 (神戸市立本山児童館)

3

第3分科会【防災・安全の事例発表】

「こべっこランドツアー」

&こんなことできちゃうよ発表会(防災・安全編)

◆プログラム内容◆

遊びを通して子どもたちに防災や安全について啓発できる「こんなことできちゃうよ」の事例を聞き、児童館や児童クラブで活用できそうなことを考えました。

まずは児童館の要配慮者を包摂した防災・減災の取り組みに、助成を行っている「つながる防災プロジェクト」の紹介がありました。

つながる防災プロジェクトを利用して防災の取り組みを実施した中筋児童館（兵庫県宝塚市）は「避難訓練コンサート」について発表しました。これは避難訓練とコンサートが掛け合わされたもので、児童館の活動を知ってもらいたいという児童館側のニーズと、発表の場所を探している音楽隊のニーズがうまく一致し始めました。その結果、児童館の実施している防災の取り組みについて多くの人に知ってもらうことが出来ました。

また、安全に関する取り組みとして、垂水児童館（兵庫県神戸市）は「まなぼうさ（学ぶ+防災）」を合言葉に、子どもたちが集まる「終わりの会」を活用して、毎月啓発活動をしています。取り上げるテーマは「防災」「いじめ」「性教育」「こどもの自殺防止」「お金」「交通安全」の6つ。繰り返し子どもに伝えることで、「それ前に先生が教えてくれた!」と確実に子どもたちの中に積み重なっているようです。

続いて、こべっこランド（兵庫県神戸市）は「こべっこBOSAI教室 ～家族で楽しくまなぼうさい～」の発表をしました。同イベントでは阪神淡路大震災において災害対応をおこなった市職員のインタビューを元につくられたクロスロード防災ゲームの体験、防災科のある高校の「お菓子ポシェットづくり」、地域団体の非常食の試食を実施しました。施設の来館者が防災について学ぶだけでなく、同じイベントに参加した団体同士がお互いの取り組みについて関心を持ち、情報交換や体験を行いました。



◆当日の様子◆

クロスロード体験では「下校途中、家と学校のちょうど真ん中まで来た時、震度7の大地震がおこりました。あなたはそのまま帰る？」など災害時における正解が何かを迷う事例をについてYES/NOで自分の考えを示し、グループで意見の共有を行いました。参加者は、災害時に自分の意見とは異なる様々な意見を持つ人が同じ課題に取り組む可能性があるということを感じました。

また参加者は各自の職場に帰った際に何が出来るかについてワークシートに書き出して考え、グループ内で話し合った後、全体に共有しました。

参加者の中からは「遊びを使って気軽に啓発することは出来るが、伝える時には真剣さも伝えたい」などという感想が出ました。



◆まとめ◆

児童館や児童クラブで出来る防災・安全の取り組みを考える際の3つのポイント

- ①頭をやわらかく 創造的に考え柔軟に遊びを活用すること
- ②いつでも何度でも 日常的にくり返し行うこと
- ③地域とつながって 地域住民・機関との連携があってこそその防災と安全

防災や安全への取り組みを特別なものと捉えず、日々の生活の中に取り入れていく姿勢が大切だということが分かりました。

◆担当者より◆

定員を大きく超える数の参加者があり、嬉しい反面、実施まで心配は尽きませんでした。皆さんの「学びたい！」という熱気に後押しされ大盛況の会となりました。今後も防災や安全について子どもたちのために何が出来るのか、子どもたちと一緒に何が出来るのか、当事者意識を持って考え続けていきたいと思えます。

STAFF

- ・上 田 沙 和 (神戸市立児童センターこべっこランド)
- ・田 村 千 裕 (神戸市立美賀多台児童館)
- ・辻 田 陽 子 (神戸市立玉津北児童館)
- ・竹 下 千 鶴 (神戸市立魚崎児童館)



第4分科会【こどもの権利】

こどもの権利 ～こたえはないよ まなび探しの旅～



◆プログラム内容◆

① こどもの権利について講義 講師：齋藤 勇介（第4分科会企画委員）

参加者の皆さんと「こどもの権利」について共通理解を深めるため、改正された児童館ガイドラインの解説とあわせて講義を行いました。

児童館は、こどもが権利の主体であることを実感し、学べる場所であることが大切です。そのために、私たち大人の姿勢や関わりについても考える機会となりました。

② なやみんちゅ〜の事例紹介

企画委員が、日頃児童館でこどもの権利に関わる中で抱えている悩み（こどもとの関わり方や意見の聴き方、参画の実践など）を、ロールプレイ（寸劇）形式で紹介しました。題して「チュ〜中央児童館のなやみんちゅ〜」。

③ 各グループで「なやみんちゅ〜」の共有と発表

事例を踏まえ、参加者が日頃児童館でこどもの権利に関わる中で感じている悩みを共有しました。

④ みんなの「なやみんちゅ〜」を深堀してみよう

各グループが発表した「なやみんちゅ〜」を、こどもの権利の視点からあらためて考えました。どのような視点が大切か、どんなことがヒントになるか、また職員目線に偏っていないかをテーマに、「チュ〜中央児童館」の先輩児童厚生員がトークショー形式で解説しました。

⑤ ロールプレイング「こどもの権利を意識して実践」

分科会で学び、感じたことのまとめとして、各グループが本日出された「なやみんちゅ〜」から一つの場面を設定し、ロールプレイングを行いました。同じ場面を職員役とこども役の両方で演じ、こどもが権利を実感できる関わり方について考えました。

◆分科会当日の様子◆

はじめは少し緊張した雰囲気もありましたが、すぐに笑顔が広がり、グループでの話し合いも和やかにスタートしました。

「なやみんちゅ～」の共有では、日頃の関わりを思い返し、「こどもの“やりたい”をどこまで大切にできるかな」「みんなの意見をどうやってまとめよう？」といった声があちこちから。素直な気持ちを語り合う姿が印象的でした。そこから先輩の「そのルールって本当に必要な？」という問いかけやロールプレイングも加わり、会場は笑いと気づきに包まれました。

「まずは気持ちを受け止めたい」「こどもを主語に考えてみよう」そんな前向きな声が生まれ、楽しみながら学び合うあたたかな時間となりました。



◆まとめ◆

こどもの権利と向き合う上で「これが正解」という答えはありません。今回の分科会は、何か一つの正解を持ち帰る場ではなく、こどもの権利についてこれからも悩み、考え続けていくためのきっかけとなりました。悩むことそのものの大切さを、みんなで実感できた時間でした。また、こどもの権利を考えるときに、大人の思いを押し付けていないか、本当にこども目線で関わられているかを改めて振り返る機会にもなりました。今回学んで終わりではなく、これからもみんなで一緒に悩みながら進んでいきましょう。それぞれのまなび探しの旅へいざ出航！

◆担当者より◆

第4分科会のテーマは「こどもの権利」。児童館に来るこどもたちにも意見を聴きながら、準備を進めてきました。会場を彩るたくさんのイラストやご当地のおみやげも、児童館に来ているこどもたちによるものです。ご協力いただいた皆さん、本当にありがとうございました。私たち企画委員にとっても、参加者の皆さんと一緒にたくさん「なやみんちゅ～」しながら学ぶことのできた、かけがえのない時間となりました。

STAFF

- ・荒木 裕美（石巻市子どもセンターらいつ）・水上 陸（町田市児童青少年課）
- ・北潟 直子（札幌市福住児童会館）・齋藤 勇介（NPO法人子育て応援団ゆうわ）
- ・光石 有希子（札幌市幌西児童会館）・山下 順平（松山市南部児童センター）
- ・井垣 利朗（川口子ども・若者育成支援センター）



第5分科会 【エンパワメント+α】

#若手の強み ってなんなん？

～出会い、語り、つながる、若手のリアルと未来へのヒントをミッケ！～

日々現場で先輩の背中を追いかけ、悩みながら走り続けている若手にも、夢や想い、若手ならではの良さがあるはずです。

先輩にはなかなか言えないことも、同世代の仲間と語り合うことで、それぞれの願いが自分だけの大切なお守りとなり、明日への自信につながることでしょう。

期待や不安、未来への希望を胸に、28人の若手たちが集まりました。

◆当日のプログラム◆

1. つながる、ひろがる、若手のわっか

分科会で初めて会う若手の仲間たち。少しでもリラックスして参加してもらえたらという思いから、冒頭と中盤に“つながりのきっかけ”となるアイスブレイクを取り入れました。冒頭の【レッツ！若手ラインナップ】では全員で円になり、1回目は会話OKで所属都道府県、2回目はジェスチャーのみで経験年数をテーマに順番に並び替えるワークを実施しました。中盤の【共通点ミッケ！deわっかづくり】では、児童館で好きな遊びなど6つのお題に対して、参加者同士の共通点を見つけるワークを実施しました。各ワークを通じて和気あいあいと楽しみながらお互いを知ることができ、その後のメインワークでも話しやすい雰囲気で見ええ意見を交わすことができました。会場には、未来へつながる若手の笑顔が輝いていました！



2. 全国の若手とつながる…？時空を超えてつながる若手

- アンケートを活用したエピソードカードゲーム・WACCARDS -

前半のワークでは、事前アンケートをもとに若手同士の対話ワークを実施しました。エピソードカードを用い、参加者は現場での感覚を数直線上に位置付けて可視化することで、それぞれの経験や価値観を共有しました。ワーク終盤ではカードの仕掛けを種明かししました。浮かび上がったキーワード

は“OVER AGE”。実は、扱っていたエピソードは30代以上の先輩方が20代の頃に経験していたエピソードだったのです。会場には驚きもありつつ、使われているワードから予想がついたという声もありました。続くワークでは、先輩方のつながりのエピソードに触れ、日常の関係性の大切さについて語り合いました。世代を越えて共通する思いや課題があることを実感し、つながりの意義を改めて捉え直す機会となりました。



3. 未来へ続け、若手のつながり

先輩方の当時の思いやつながりの形をカードやシートを通して知った若手たち。後半は、【自分たちの未来へのつながりを考えよう！】をテーマに展開しました。

この先もつながり続けるために、いつまでに・どんなことをしたいか、個人で提案したあとグループで意見をまとめて全体で共有しました。最初はなかなか思いつかなかった人も、グループで話すとどんどん盛り上がり、全グループが「一番に発表したい！」と手を挙げるほど会場には若手の笑顔とエネルギーが弾けました。「これからこの仲間たちと『みんなの地元観光』『お疲れさま会・頑張ってるね会』『行事の企画運営』をしてみたい！」「オンラインやSNSなども活用して、つながり続けて実現させようね。」とうなずき合いました。



4. #若手の強み ってなんなん？

事前アンケートでいただいた先輩方からの【今の若手にひと言】を共有しました。その言葉はどれも温かく、若手にとって大きな励みとなるメッセージばかりでした。それを受けて、最後に【若手の強み】につ

いて問いかけたところ、`自由な発想、`挑戦する姿勢、`可能性も時間も無限大、`といった前向きな声が次々と挙がり、若手の表情も更にいきいきとしていました。自分たちの良さを言葉にして再認識することで、未来への自信と希望につながる時間となりました。



◆担当者“わっかーず”より◆

分科会に集まった若手たちがアイスブレイクや数々のワークを通して、つながるきっかけを持つことができたのではないかと感じています。悩んだときや壁にぶつかったとき、ここで出会えた全国の仲間たちがきっと力になってくれる—そう信じています。ここで生まれた〇（わっか）が∞の可能性を秘め、また再会できる日を楽しみにしています。私たち担当者だけでなく、今回出会った若手みんなが“わっかーず”の仲間です。この輪は、これからも広がり続けます。

STAFF

- ・長谷川陽子（四日市市こども子育て交流プラザ）
- ・山口 祐佳（札幌市北東白石児童会館）
- ・金森 佳子（札幌市琴似小ミニ児童会館）
- ・久保 允（名取市増田児童センター）
- ・蒲 敦徳（北名古屋市西春児童クラブ）
- ・祖父江 司（東郷町立兵庫児童館）
- ・宮崎 翔梧（京都市百々児童館）
- ・高阪 麻子（東郷町立兵庫児童館）

第6分科会【中学生・高校生】

『中・高校生世代との関係づくりは、むずかしい??』

ニガテ??楽しい???

～「こどもの権利」を大事にすると、利用促進される?!～ シーズン2



◆プログラム内容◆

本分科会では、前回のえひめ大会同様に、事例発表者や参加者が中・高校生に対応したときの“しくじり”をヒントにして、どのように中・高校生の居場所を作っていくかを話し合いました。また、前回大会でも作成した『たねまきノート』を今回も作成しました。『たねまきノート』には、事例を受けての気づきや、自分たちのしくじりから学んだことなど、参加者が今後実践の場でどのような種をまいていくかを自分たちで書いていきました。最後には参加者同士でシールにメッセージを書いてエールを送り合い、『たねまきノート』を完成させました。

事例発表

新城宗史氏（宮古島市くすくべ児童館）と、前回大会にも参加していた大門更紗氏（札幌市里塚児童会館）から、しくじりをもとに実践した取り組みを共有してもらいました。

宮古島市くすくべ児童館では、中・高校生の利用マナーが悪く、食べ物・飲み物がゴミ箱に捨てられずに放置される状態が続いたため、職員が利用のマナーやルールについて厳しく指導したそうです。その結果、中・高校生の利用が0人になってしまい、中・高校生に「勝手」と「自由」の違いを伝えることに苦慮したとのことでした。

札幌市里塚児童会館では、中・高校生の利用が0人の日も多かったため、近隣高校にアウトリーチしたところ、専用時間があること自体を知らない高校生が多いことがわかりました。そこで、PRのためフライヤーを作成して再度配布に行ったところ、今度は「高校生は紙のフライヤーなんて見ない」「情報はインスタで見る」と言われてしまったとのことでした。



◆参加者の意見、ワーク内容など◆

これから新しい児童センターができるので、どうすれば中・高校生が来てくれるか知りたいという方から、つい中・高校生を「ルール違反や非行などがないか」という防犯の目で見てしまうという方まで、参加者の悩みはさまざまでした。

発表された事例をもとに、自分たちの“しくじり”もグループで共有していきました。「来館者に声をかけたところ『さっきも別のスタッフに同じことを聞かれた』と言われて情報共有の大切さに気づいた」という話や、「Nintendo Switchでゲーム大会をしようと思ったが、持っていない人のことも考えてあえてスーパーファミコン大会をやってみたら盛り上がった」といった、中・高校生と関係を築くうえでのヒントがそれぞれのグループから挙がりました。



◆まとめ◆

各グループで出た“しくじり”からの学びや、中・高校生と関わるうえでの気づきを、それぞれの『たねまきノート』に記録しました。

ノートには、「日常の会話や関わりこそが大切」「アイメッセージで相手に気持ちを伝えること」「種をまいても芽が出るタイミングは人それぞれ。全て芽が出なくても、可能性の種をまき続けていく」といった感想が記されていました。

最後に、これからの“たねまき”を継続して共有していけるよう、オープンチャットへの登録をご案内して分科会を終了しました。

◆担当者より◆

前回のえひめ大会でまかれた「たね」は1年経ってどうなったか、今年はどんな「たね」がまかれるかを聞いてみたくて、シーズン2の準備を進めてきました。運営メンバーは北海道から沖縄まで、当日の参加者の立場もさまざまでしたが、中・高校生のための「たね」を少しずつでも持ち帰ることができたように感じます。

この「たね」がそれぞれの現場でどのような芽を出して育っていくか、今から楽しみです。

STAFF

- ・志田 拓人（目黒区平町児童館）
- ・東 晋次（札幌市屯田北児童会館）
- ・小森 珠恵（公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会）
- ・新城 宗史（宮古島市ぐすくべ児童館）
- ・大門 更紗（札幌市里塚児童会館）
- ・松浦 大輔（仙台市八本松児童館）
- ・山下洋一郎（松山市久米児童館）



第7分科会【あそび】

「遊びひらめきラボ — 遊びのアイデアふってこい」

◆プログラム内容◆

本分科会は、大型児童館職員が企画運営し、児童館ガイドラインに示される「遊びのプログラム開発・普及」の役割を踏まえ、参加者とともに「遊び」の本質を再確認しながら、実践的に遊びのプログラムをつくることを目的に実施しました。日々の活動の中で「こどもと何をして遊ぶか」「遊びとは何か」に悩む職員が多いことを踏まえ、身近な素材を用いて体感的に理解し、現場で活用できる発想力を高めることをねらいとしました。

導入では、グループに分かれて運営メンバーおよび参加者が自己紹介を行い、「こどもの頃に夢中になっていた遊び」を紹介しあいました。世代や地域による遊びの違いや共通点が話題となり、名前のある遊びだけでなく、特別な意味や目的がなくとも繰り返し行っていた行為そのものが名前のない遊びであったことを振り返る機会となりました。

実践を行う前に「遊び」とは、楽しみのために自ら進んで行う主体的な活動であり、同じ行為であっても強制されれば遊びにはならないこと、また成果や評価、完成形を求めるものではなく、その過程そのものに価値があることを共有しました。あわせて、支援者が結果を求め過ぎることで遊びの本質を損なう可能性についても触れ、こどもの主体性を尊重する姿勢の重要性を再確認しました。

グループワークでは「遊びのアイデアふってこい」と題し、児童館にとって身近な素材である①新聞紙、②ペットボトルキャップ、③紙コップを用いて順番にあそびを考える実践を行いました。素材1種類ごとに、まず個人で思わずやってみたくなる遊び方を書き出し、グループメンバーに紹介しながら実演し共有しました。それぞれが出したアイデアを、偶然性や繰り返しの面白さを取り入れたりしながら遊びのプログラムとしての試行錯誤を重ね発展させました。最後に素材ごとでグループイチ押し遊びを選定し、全員の前で実演披露後、他のグループも同じようにその遊びを体験しました。



各グループが発表したイチ押しの遊びのプログラムには次のような特徴がありました。

新聞紙では、写真の人物の気持ちを一言で表す遊びや、記事の文字を切り抜いて五・七・五で再構成する言葉遊び、好きなヘアスタイルをつくるなどの造形遊び、ちぎって長さを競うゲームやリレー形式の身体遊びなど、多様な展開が見られました。参加者が工夫を重ねながら遊びを発展させる過程そのものが大切にされていました。



ペットボトルキャップでは、飛ばす、裏返す、つかみ取るなどの単純な行為にルールを加え、偶然性や曖昧さを楽しむ遊びが生まれました。勝敗はありつつも、厳密さよりその場の感覚や盛り上がりが重視されました。

紙コップでは、積む・投げる・崩れる行為を軸に、成功や失敗も含めて楽しむ遊びが共有されました。条件を加えたタワーづくりや団体戦なども行われ、ルールの調整によって年齢や人数に応じた展開が可能であることが確認されました。

◆まとめ◆

本分科会を通して、遊びは「特別な道具や完成形が必要なもの」ではなく、身近な素材と、人が関わることで自然に立ち上がるものであることが、参加者自身の体験を通して共有されました。また、「思わずやってしまう」「うまくいかないからこそ繰り返したくなる」「ルールが少し曖昧な方が盛り上がる」といった遊びの特徴が、実践を通して具体的に可視化されました。



◆担当者より◆

参加者自身があそびのプログラムを考えることの楽しさを感じ、自分たちの役割が「遊びが生まれる場を整える存在」であること、そして遊びの過程そのものを尊重することの大切さを再確認する分科会となりました。

STAFF

- ・菅 智美 (岩手県立児童館いわて子どもの森)
- ・長崎 由紀 (岩手県立児童館いわて子どもの森)
- ・梅田 広美 (新潟県立こども自然王国)
- ・村田 弘孝 (福井県児童科学館)
- ・阪野 大介 (愛知県児童総合センター)
- ・坂口 幸穂 (三重県立みえこどもの城)
- ・尾松 佳織 (さぬきこどもの国)
- ・上木 秀美 (えひめこどもの城)

第8分科会【ソーシャルワーク】

合言葉は『あっ！それ、ソーシャルワーク！』

～こどもとの“いつも”を振り返る・考える・そしてツナグ～



◆プログラム内容◆

1、アイスブレイク

【JIDOUKAN TO THE FUTURE2】のカードゲームを用いて、悩みを児童館や地域資源と結び合わせ解決をめざすワークを行いました。意外な社会資源を使ってお悩みに答える参加者も多数。驚きと笑いに包まれた時間でした。児童館・児童クラブにはたくさんの応援団がいることが確認できました。

*参加者の声より

- ・あれもこれも社会資源になり得ることを知り、より一層地域との繋がりを意識して職務にあたることができます。
- ・とても場が和み、地域資源がたくさんあることやソーシャルワークが理解しやすかったです。



2、クイズ！？ソーシャルワークみつけた

日常の遊びの中で、友達関係についてふと話し始めた児童と、それに寄り添う支援者のロールプレイ動画を視聴していただきました。その後、「こどもへの寄り添い」と「職員同士の連携」という視点からの「気づき」をグループで共有し、最後に全体でシェアをしました。実はソーシャルワークがこどもとの日常に根付いていることを知り、身近な視点であることを結び付けました。



*参加者の声より

- ・日頃からあり得る簡単な事例を通じて皆さんと話し合う事ができました。これがソーシャルワークなのだと思わずに隣でした。
- ・ソーシャルワークは難しく改まったものという認識がありましたが、今現場で私達が行っている事がまさしくソーシャルワークなのだと思わずに気づきました。

3、ソーシャルワークのかんたんなおはなし

企画委員より、キースピーチとして「ソーシャルワークは日常の身近に存在している」というメッセージの中で、こども（保護者等）の困りや課題を解決する前に、まずは拾う視点が大切になる。いわゆるソーシャルワークの入口をつかむ場面として「あそび」「来館時」について解説がありました。

*参加者の声より

困りごとや課題を拾うことが一番で、拾うことも普段の関わりができていからこそ拾える。こどもの本音はあそびの時に出るため、遊びの大切さを知りました。

4、ソーシャルワークの事例に触れよう

各グループを一つの「児童館」に見立て、福祉課題を抱えたこどもの事例検討を行いました。ソーシャルワークは、「記憶だけでなく記録に残す」ことも実践の一つであることから、実践記録シートの作成にも取り組み、児童館のスタッフの一員として、熱い議論が飛び交いました。

*参加者の声より

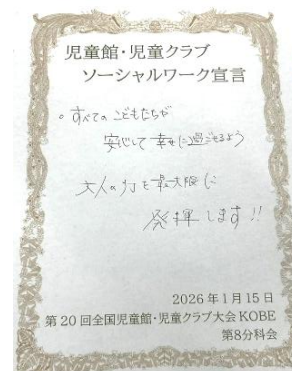
普段、様々なケースにおいて、実現可能か否かをベースに考えることが多い中で、今回はそこにフォーカスせずに議論を進められたことで、他の誰かの視点により解決への糸口が見つかるかもしれないという経験ができました。

◆まとめ◆

一連のプログラムを経て、生まれたソーシャルワークのキーワードを集めて、各グループが自分たちの「理想とする児童館名」として決定をしました。結果、「その子の幸せ児童館」、「ラッピング児童館」、「何でも話せる児童館」、「ひとりじゃないよ児童館」、「みんなの味方児童館」、「アンテナ児童館」の6つの児童館が誕生しました。

また各自のこれからの行動、実践を表明するために、ソーシャルワーク宣言を書き上げると、「たくさん聴くよ!」「遊ぶよ!」「つながるよ!」といった、こどもたちの幸せを願う力強く温かい言葉が並びました。

参加者の皆さんは、遊びや日々のささやかな関わりの中にこそ「気づき」があり、それがソーシャルワークにつながることを実感し、また、全国の仲間と「つながる」ことの大切さも強く感じられていたようです。



◆担当者より◆

この分科会は、ソーシャルワークという言葉が持つ少し難しそうな響きを、もっと身近に感じてもらおう!という運営委員の思いから立ち上がりました。私たちが目指したのは、ソーシャルワークは誰もが実践できる、そしてすでに実践しているあたたかい支援であるという理解を深めていただくことです。そして、それがこどもたちの幸せ、明るい未来につながってほしい。この分科会が、皆さんにとって新たな気づきと行動のきっかけとなればと思います。



STAFF

- ・大久保 さくら (中標津町西児童館)
- ・溝口 晋太郎 (たかつかさ児童館)
- ・青塚 美幸 (北門児童センター)
- ・笠原 素子 (札幌市二条はるにれ児童会館)
- ・瀬戸 理音 (労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団)
- ・川邊 素子 (岩室地域児童館)
- ・宮崎 恭子 (金沢市立扇台児童館)
- ・高橋 由香里 (鍛冶ヶ一色児童館)
- ・朴澤 愛美 (名取市下増田児童センター)



第9分科会【人材育成】

ミッション イズ アップデート！

～これって当たり前？を「今」にアップデート！～



◆ プログラム内容 ◆

本分科会では、人材育成における“当たり前”を見直し、異業種の方たちの視点を取り入れることで、若手との向き合い方をアップデートすることを目的に実施しました。

1. 参加者シートの記入
開始前に「参加者シート」を配付し、参加者には知りたいこと・解決したいこと・話したいことなど、今回の分科会に期待する点を自由に記入してもらいました。
2. 異業種インタビュー動画の視聴（約30分）
看護師、助産師、大学教員、人事担当者、プログラマー、宝石店元店長の児童館職員、フリマネット代表など、全国から多様な職種の方々に、若手育成の工夫や視点を聞いたインタビュー動画を撮影し視聴しました。
3. グループディスカッション（45分×2回）
動画で印象に残った言葉を付箋に書き出し、テーマごとにグループを編成して対話しました。「信じて待つ」「環境づくり」「“やりたい”を育む」などのキーワードをもとに、現場の悩みや成功例を共有しました。後半は深掘りしたいテーマへ移動し、「パートスタッフのやる気を育てる」など新たな議論も生まれました。
4. クロージング
最後に再び「参加者シート」を記入し、得た気づきや明日からの行動のヒントを言語化して終了しました。



◆参加者の声から◆

- ・「日々の雑談」「信じて待つ」「こどもに寄り添い教えることを職員にも寄り添うようにして欲しい」という言葉や話がとても心に残っています。自分自身がアップデート、今の時代に合うためにしていかなければならない。と強く思いました。
- ・「やらないといけないこと」を「やりたい！」に変える！（育む）
- ・一緒に働きやすい人になれていたか？多角的に考える時間にもなりました。
- ・チームみんなの心が動く時を見逃さない（小さな変化も）
- ・実におもしろい、実に楽しい、色々な話を、色々な表情!!こんな気分ひさしぶり!!



◆まとめ◆

まずは、たくさんの方が、人材育成に悩んでるということが分かりました。そして、人材育成で大事なことは「対話や雑談が大事＝人は向き合う中でしか変化できない」ということ。文字どおり「合う」ですから、向き合うということには、「自分」も含まれますね。

参加者同士で、お互いに変化をしながら対話（雑談？）できたことが、この分科会を実施したことの意味だと思います。参加者のみなさんが、まさに実現してくださったのです。

さあ、これからは、「人と人が向き合って変化していく場」を、みなさんの職場で作っていきましょう。

◆担当者より◆

北は北海道、南は沖縄まで全国のスタッフが昨年夏からオンラインを通し、時に自分たちの日常や悩みも語りながら「アップデート」をテーマに企画を練りました。分科会后、参加者の顔や声からは「もっと語りたい」「楽しかった」が溢れていて、参加者、担当者がみんなで一緒に作りあげた分科会となりました。

STAFF

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| ・渡邊 由貴（名取市下増田児童センター） | ・水野 かおり（氷川児童センター） |
| ・大山 真紀（浦添市まちなど児童センター） | ・園部 信 大（まきば児童センター） |
| ・安藤 耕司（練馬区子育て支援課） | ・設楽秀子（明善児童センター） |
| ・上杉佳子（札幌市あいの里児童会館） | ・鈴木清美（札幌市苗穂・本町児童会館） |



交流会

会場/ザ マーカススクエア神戸

18:00 交流会 受付開始

18:30 交流会 開始

◆ウェルカムドリンク有馬サイダーと缶バッジでお出迎え

◆神戸から愛をこめて～地元協賛品大抽選会～

◆全国児童厚生員有志によるウクレレうかれれ隊

ほか

【司会】 神戸市立 雪御所児童館 児童厚生員 堀池 愛香

20:00 交流会 終了 ～記念撮影～



(飯田副委員長の挨拶)



(ウクレレうかれれ隊の演奏)



KOBEイラスト（Tシャツデザイン）について



こべっこランドはこどもの頃、1番記憶にあります。料理や絵本、はじめてのパソコン、ボールプールや、音楽、運動、そして、何かをつくったり、もちろん絵を描く事も。こべっこランド楽しんだあとの神戸の風景を描きました。またいきたいな、どんな事をしようかな。そんな楽しみのはじまりの気持ちの風景です。

イラスト みしまあきひろ





記念シンポジウム

「継承していく」ということ



阪神・淡路大震災から17日で31年となります。その間東日本大震災や能登半島地震などの震災をはじめ、西日本豪雨などの洪水被害など、多くの災害が発生しています。今後南海トラフの発生が懸念されるなか、阪神・淡路大震災、東日本大震災、西日本豪雨に関わった児童館職員をシンポジストに迎え、今一度災害時の児童館・児童クラブの役割とは何なのか、こどもの権利を踏まえた居場所・あそびの権利を確保するために私たちができることを皆さんと一緒に考えました。

コーディネーター：安部 芳絵(あべ・よしえ)氏

工学院大学教授、博士(文学)。早稲田大学文学学術院助手・助教を経て現職。専門は、国連子どもの権利条約、災害時の子ども支援。こども家庭庁児童厚生施設及び放課後児童クラブに関する専門委員会委員、東京都子供・子育て会議委員、世田谷区子どもの権利擁護機関委員。単著に『災害と子ども支援』(学文社、2016)、『子どもの権利条約を学童保育に活かす』(高文研、2020)、共著に『研究者、生活を語る』(岩波書店、2024)、『声を聴くこと ゆらぎと気配の弁証法』(春風社、2025)など。

2018 西日本豪雨



パネリスト

倉敷市倉敷児童館
館長 池田 眞知子 氏

1995 阪神・淡路大震災



パネリスト

神戸市立大黒児童館・板宿児童館
館長 小野 晃弘 氏

2011 東日本大震災



パネリスト

岩手県立児童館いわて子どもの森
チーフプレリーダー 長崎 由紀 氏

1. 趣旨説明(コーディネーター 安部芳絵氏)

(1)子どもの権利条約の視点

安部氏より、国際連合の「子どもの権利条約」に基づく4つの一般原則が提示された。

- 差別の禁止
- 子どもの最善の利益
- 生命・生存・発達の保障
- 意見表明権の尊重

特に第12条「意見表明権」は、災害時にも停止されるものではなく、子どもが自らの生活を一定程度コントロールできることが回復(レジリエンス)につながると強調された。

(2)災害時における「遊び」の意義

- 遊びは贅沢ではなく権利である(第31条)。
- 子どもは言語化できない感情を遊びの中で表現する。
- 遊びの保障は心理的回復に直結する。

大人の支援は「先回り」ではなく、子どもの声を受け止める姿勢が重要である。

2. 事例報告

2-1. 岩手県立児童館「いわて子どもの森」チーフプレーリーダー 長崎 由紀 氏 (東日本大震災の実践)

(1)活動の概要

- 震災直後、避難所を巡回し遊び支援を開始。
- 「また来るね」と言える継続的支援を重視。
- 内陸部の児童館職員が連携し「いわて子どもあそび隊」を結成し、支援ネットワークを構築。

(2)こどもの変化

- 当初:無言で大量にビーズを作る等、没頭型の行動。
- 徐々に:デザインを工夫、他者へのプレゼント、順番を守る姿へ変化。
- 「やってもらおう」側から「やってあげる」側へ(自分たちで遊びコーナーを企画)。

(3)学び

- 「好きなだけ使っていていいよ」という保障が回復の土台。
- 支援は押し付けではなく、こどもを置き去りにしないこと。
- 顔の見える関係性が支援者自身の支えにもなった。

2-2. 倉敷市倉敷児童館 館長 池田真知子氏 (西日本豪雨災害の実践)

(1)初動

- 市内6館が休館し、被災地域へ支援に入る。
- アポなしで避難所を訪問し、ニーズを自ら探る。

(2)活動の展開

- 幼稚園での遊び支援から開始。
- 35度の室内での遊び提供。
- 徐々に預かり保育支援へ移行。
- 母親クラブ等と連携し、支援の広がりを形成。

(3)こどもの様子

- 職員への強いスキンシップ。
- 「明日も来る?」という不安の表出。
- 「楽しかった」という記憶への転換。

(4)成功要因

- 被災地域が限定的であったこと。
- 日頃からの「おでかけ児童館」実践。

- 行政との信頼関係。
- 地域人脈の活用。
- 安部氏の検証がその後の取り組みに大きく役立った。

2-3. 神戸市立大黒児童館・板宿児童館館長 小野晃弘氏（阪神・淡路大震災の経験）

(1) 避難所の実態

- 中学校に 1200 人が避難。
- 運動場は仮設住宅予定地、こどもの遊び場が消失。
- 大人は生活再建で精一杯、こどもは後回し。

(2) こどもの変化

- 当初：緊張し大人を手伝う。
- 長期化：無気力、問題行動、刹那的行動。

(3) 転機

- 校庭の一部を囲い「遊び場」を確保。
- こどもの表情が大きく変化。
- 復興担当教員として校庭整備、サッカークラブ創設（現在も継続）。

(4) 提言

1. 児童館は地域の子育て拠点であること。
2. こどものニーズを受け止める経験の蓄積。
3. 遊びの専門性を高めること。
4. 平時からの地域・行政との連携。

3. パネルディスカッション

主な論点

(1) 遊び場が奪われる現実

- 災害時、最初に失われるのがこどもの空間。
- 「場所」があればこどもは自ら遊びを創造する。

(2) こどもの主体性

- 支援の押し付けは逆効果になる場合がある。
- こどもが「やりたい」と言える余白が必要。
- 遊びの中で回復の兆しが現れる。

(3) 地域連携の重要性

- 日常からの顔の見える関係。
- 行政との信頼構築。
- 児童館がハブとなる地域ネットワーク。

4. まとめ

本シンポジウムでは、阪神・淡路大震災から30年超、東日本大震災、西日本豪雨と続く災害経験を通し、次世代へ何を継承するかが議論された。

共有された核心

- 災害時こそこどもの権利は守られなければならない。
- 遊びは「余裕」ではなく「回復の基盤」である。
- 支援は一方通行ではなく、こどもの声を受け止める双方向の関係。
- 平時の準備と連携が有事を支える。

児童館・児童クラブは、単なる施設ではなく、こどもの権利を地域で具現化する拠点であるという認識を参加者全体で共有し、閉会となった。

※AIによる要約を使用しています



■遊び支援の継続性が課題

【屋外】子どもの遊ぶ環境の減少

【屋内】避難所に子どもの遊び場がない

専門職自身の被災・生活再建で支援者が不在

遊び支援を継続的に行うことが困難に

さらに
子どもの権利条約を理念とするこども基本法であるが、「遊び」は規定されていない。災害時の遊びをどう捉えたらいいの？

(安部氏 スライドより引用)

これからの児童館・児童クラブに期待する事

こどもに関わる者が 遊びの専門性を高め、身近にあるものや様々な環境で遊べるスキルを高めること

(小野氏 報告より引用)



エンディングセレモニー（閉会式）

・全国発議	全国児童厚生員研究協議会	会長	木戸 玲子 他役員
・次回予告	次回開催地(北海道)より		
・閉会挨拶	第20回全国児童館・児童クラブ大会 KOBE	実行委員長	金坂 尚人

エンドロール

【閉会式】

1. 開会・エンディング開始

エンディングセレモニーが開始され、2日間にわたる大会の締めくくりが行われた。

2. 全国発議

登壇者：全国児童厚生員研究協議会 会長 木戸玲子氏 他役員
「第20回全国児童館・児童クラブ大会 KOBE全国発議」が行われた。

参加者一同の賛同をもって発議が承認された。

3. 次回開催地挨拶(北海道大会)

次回大会：第21回 全国児童館児童クラブ大会(北海道)

主な内容

- ・ 15年ぶりの北海道開催
- ・ 変化の時代だからこそ全国の仲間が集い、未来への展望を示す大会にしたいとの決意表明

開催日程：10月31日・11月1日

開催地：北海道

北海道各地代表者による活動紹介

北海道内各地の児童館関係者より活動報告が行われた。

各地域の特色ある取り組みと、こどもを中心に据えた地域づくりへの思いが共有された。



(全国発議)



(北海道大会で会いましょう！)

4. 閉会挨拶

阪神淡路大震災当時、社会福祉協議会の職員たちは児童館が使用できない状況下でも「あおぞら児童館」の旗を掲げ、地域の公園や学校など福祉が必要なところに直接出向いて子どもたちや保護者の居場所を作りました。この旗は、児童館のアウトリーチの象徴です。

復興支援に関わるときに、私自身が震災を経験していないことから、支援に入るにあたり大きな揺らぎを感じました。そんな時、先輩である先生にもらった言葉を、贈ります。

「あなたはあなたのできることをしなさい」

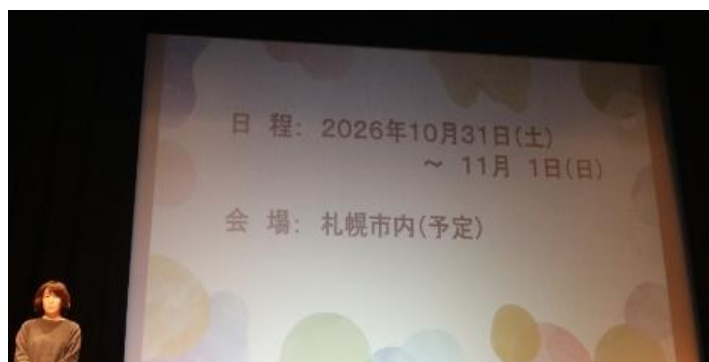
私たちは過去から学び未来につなげることができます。日常的に地域で関わり子どもたちの笑顔を守っている児童館・児童クラブ職員だからこそ災害時にさまざまなアプローチが可能で、遊び・居場所の必要性を発信することができます。子どもたちの言葉や思いを代弁していく存在として全国の仲間と共にすすんでいきましょう。

5. エンドロール・閉会

大会の様子やスタッフの名前を投影したエンドロールが流れ、2日間にわたる第20回全国児童館・児童クラブ大会（神戸大会）は盛会のうちに閉会した。

次回、北海道大会での再会を誓い、全日程を終了。

※AIによる要約を使用しています



閉会式を動画でご覧いただけます(21分)

<https://youtu.be/X0bj9dF05pw>





運営スタッフ 名簿

【実行委員】

	役 職	氏 名	所 属
1	委員長	金坂 尚人	神戸市／六甲道児童館
2	副委員長	飯田 剛治	神戸市／鹿の子台児童館
3	副委員長	敷村 一元	全国児童館連絡協議会 会長
4	委員	依田 秀任	児童健全育成推進財団 業務執行理事
5	委員	大角 玲子	神戸市立児童センターこべっくらんど
6	監事	木戸 玲子	全国児童厚生員研究協議会 会長

【神戸 企画運営委員/拡大企画運営委員】 ○印は部会長・企画運営委員

	担 当	氏 名	所 属
1	企画運営委員長	○水野 宏明	神戸市／太山寺児童館
2	全体会部会	○岡部 裕子	神戸市／頌栄児童館
3		小野 里嘉	神戸市／白川台児童館
4		竹村 純一	神戸市／泉台児童館
5		花房 奈子	神戸市／港島児童館
6		森 松美	神戸市／二宮児童館
7		藤本 麻利子	神戸市／菅の台児童館
8		山地 藍	神戸市／あさひ児童館
9		岸本 美和	神戸市／秋葉台児童館
10		村山 直子	神戸市／駒栄児童館
11		加藤 和子	神戸市／長田児童館
12		千葉 恵美子	神戸市／北五葉児童館
13		稲付 容子	神戸市／南五葉児童館
14		横張 悠子	神戸市／泉台児童館
15		広報・交流部会	○大川 晴司
16	春井 義憲		神戸市／竹の台児童館
17	吉川 諒		神戸市／平野児童館（西区）
18	松村 崇司		神戸市／原田児童館
19	田中 修二		神戸市／稗田学童保育コーナー
20	小林 峰子		神戸市／千鳥が丘児童館
21	下玉利 佳奈子		神戸市／玉津児童館
22	堀池 愛香		神戸市／雪御所児童館

23	第1分科会	○岡田 純子	神戸市立児童センターこべっこランド
24	災害・子ども支援	橋本 香寿美	神戸市／垂水児童館
25	第2分科会	○樋口 勲	神戸市／神陵台児童館
26	防災の理解・実践	本田 陽人	神戸市／たかとり児童館
27		藤岡 美由紀	神戸市／舞子児童館
28		須藤 華子	神戸市／桃山台児童館
29		平山 直樹	神戸市／本山児童館
30		第3分科会	○上田 沙和
31	防災安全の事例発表	田村 千裕	神戸市／美賀多台児童館
32		竹下 千鶴	神戸市／魚崎児童館
33		辻田 陽子	神戸市／玉津北児童館
34	司会	山下 草太	神戸市／六甲道児童館
35		梶本 彩	神戸市／すずらんだい児童館

【全国 企画運営委員】

	担当	氏名	所属
1	第4分科会 子どもの権利	水上 陸	東京／町田市役所
2		荒木 裕美	宮城／石巻市子どもセンターらいつ
3		井垣 利朗	東京／川口子ども・若者育成支援センター
4		北潟 直子	北海道／札幌市福住児童会館
5		齋藤 勇介	宮城／NPO法人子育て応援団ゆうわ
6		光石 有希子	北海道／札幌市幌西児童会館
7		山下 順平	愛媛／松山市南部児童センター
8	第5分科会 20代の強み発掘	長谷川 陽子	三重／四日市市子ども子育て交流プラザ
9		山口 祐佳	北海道／札幌市北東白石児童会館
10		金森 佳子	北海道／札幌市琴似小ミニ児童会館
11		久保 允	宮城／名取市増田児童センター
12		蒲 敦徳	愛知／北名古屋市西春児童クラブ
13		祖父江 司	愛知／東郷町立兵庫児童館
14		宮崎 翔梧	京都／京都市百々児童館
15		高阪 麻子	愛知／東郷町立兵庫児童館

16	第6分科会	山下 洋一郎	愛媛／松山市久米児童館	
17	中学生・高校生	東 晋次	北海道／札幌市屯田北児童会館	
18		小森 珠恵	北海道／公財 さっぽろ青少年女性活動協会	
19		志田 拓人	東京／目黒区平町児童館	
20		新城 宗史	沖縄／宮古島市ぐすくべ児童館	
21		大門 更紗	北海道／札幌市里塚児童会館	
22		松浦 大輔	宮城／仙台市八本松児童館	
23		第7分科会	菅 智美	岩手／岩手県立児童館いわて子どもの森
24	あそび	長崎 由紀	岩手／岩手県立児童館いわて子どもの森	
25		梅田 広美	新潟／新潟県立こども自然王国	
26		村田 弘孝	福井／福井県児童科学館	
27		阪野 大介	愛知／愛知県児童総合センター	
28		坂口 幸穂	三重／三重県立みえこどもの城	
29		尾松 佳織	香川／さぬきこどもの国	
30		上木 秀美	愛媛／えひめこどもの城	
31		第8分科会	大久保 さくら	北海道／中標津町西児童館
32	ソーシャルワーク	溝口 晋太郎	京都／たかつかさ児童館	
33		青塚 美幸	北海道／北門児童センター	
34		朴澤 愛美	宮城／名取市下増田児童センター	
35		笠原 素子	北海道／札幌市二条はるにれ児童会館	
36		瀬戸 理音	宮城／労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団	
37		川邊 素子	新潟／岩室地域児童館	
38		宮崎 恭子	石川／金沢市立扇台児童館	
39		高橋 由香里	愛知／鍛冶ヶ一色児童館	
40		第9分科会	渡邊 由貴	宮城／名取市下増田児童センター
41		人材育成	大山 真紀	沖縄／浦添市まちなと児童センター
42	園部 信大		香川／まきば児童センター	
43	設楽 秀子		長野／明善児童センター	
44	上杉 佳子		北海道／札幌市あいの里児童会館	
45	鈴木 清美		北海道／札幌市苗穂・本町児童会館	
46	水野 かおり		埼玉／氷川児童センター	
47	安藤 耕司		東京／練馬区子育て支援課	

災害時、子どももの「遊び」環境確保を

阪神・淡路大震災などの経験を踏まえ、子どもへの支援のあり方を考えるシンポジウムが、神戸市中央区の神戸文化ホールで開かれた。子どもにとつて遊ぶことが傷ついた心を回復させ、考えを主張する機会になることが報告され、ニーズをくみ取ることの重要性を確認した。

阪神・淡路大震災の経験から子どもたちの遊び場を確保することの重要性について語る小野晃弘さん(右)＝神戸市中央区楠町4



神戸でシンポ、各地の児童館長ら登壇

児童館職員でつくる全国児童厚生員研究協議会などが主催の「全国児童館・児童クラブ大会KOBE」の一環。同市須磨区の大黒、板宿児童館長・小野晃弘さん、岩手県立児童館いわて子ども森の長崎由紀さん、岡山県の倉敷児童館長・池田真知子さんが登壇し、工学院大の安部芳絵教授が司会を担当。東日本大震災と西日本豪雨の事例も発表された。

小野さんは、阪神・淡路の際に同市須磨区の中学校で避難所運営に携わった経験に言及。避難所暮らしで目標を持ってない子どもが、いたずらに走るケースがあった。避難者の提案で運動場にサッカーなどができるスペースを設け、体を動かす機会を確保すると生き生きと過ごせるようになり、「気持ちを解放できる環境を整えるのは大人の責任。児童館や児童クラブだからこそその備えがある」と話した。

(門田晋一)

(2026年1月20日 神戸新聞)

全国児童館・児童クラブ大会

防災の事例発表など

「第20回全国児童館・児童クラブ大会KOBÉ」（主催＝全国児童館生員研究協議会、全国児童館連絡協議会、一般財団法人児童健全育成推進財団）が1月15、16日、神戸文化ホール（神戸市中央区）で開かれた。

全国児童館連絡協議会の敷村一元会長が開会を宣言。児童健全育成推進財団の鈴木一光理事長が「少子化の時代、生まれてくる子どもを一人も取り残さないよう、健全育成にま

い進ずるという自覚を改めて持つような大会にしてほしい」とあいさつした。

大会テーマは「LIFE NK」つながるココロ つなげるミライ」。阪神・淡路大震災被災地の神戸市が会場となったことを踏まえ、1日目の分科会では災害時のことの実態把握や、復興への意見反映・参加に必要な支援を探るほか、防災の理解と実践、防災安全の事例発表などがあつた。

2日目は「継承して

いくこと」をテーマにシンポジウムを開いた。今後、南海トラフ地震の発生が懸念され

る中、阪神・淡路大震災、東日本大震災、西日本豪雨に関わった児童館職員がシンポジストとして登壇。災害時の児童館・児童クラブの役割や、こどもの居場所、遊びの権利を確保する手法などについて意見を交わした。

（濱本高佑）

（2026年2月3日 福祉新聞）





フォトギャラリー







(大会終了後、神戸スタッフで集合写真)

【編集・発行】 第20回全国児童館・児童クラブ大会KOBЕ実行委員会

〒652-0862 兵庫県神戸市兵庫区上庄通1-1-43 こべっこランド

TEL 078-958-8011

メール mail@kobekko.or.jp